

資料

選択必修科目「造形」における モザイク画技法を取り入れた授業の取り組み

末田 光一*

要約：今から40年ほど前、領域「絵画製作」(当時)にかかる保育者養成関連科目の2年次選択必修科目において、受講生の意欲に応えるために、保育者養成に沿いながら達成感を結果として大きく膨らますことができ、さらにその意欲を実際に形あるものとしても残せるような授業の取り組みの模索を開始し、現在に至った。それは保育の場における多様な造形的技法の習得をねらいとして、共同製作の形態を取りながら、学生にとって新たな表現技法に接近できる機会として、モザイク画技法を取り入れた授業を展開してきた。素材、道具の使用や授業展開の仕方は、当初手探り状態の中からの出発であったが、これまで55点のモザイク画作品が製作され、学内に展示されてきている。また僅かではあるものの、最近になって保育現場においてもモザイク画技法による子ども達の表現に接することができるようになってきた。この授業の取り組みと教育効果を報告した。

キーワード：モザイク画技法、造形表現、保育者養成

I 目的

幼稚園教諭および保育士の養成校としてその教育課程においてこれまで「基礎技能」、そして「保育の表現技術」に関するものの中で、領域「表現」(現在)の造形表現に関わる選択必修科目として平成2年度までは「図画工作Ⅱ」を、平成3年度以降は「造形」を2年次通年演習2単位として位置付けてきた。但し、平成14年度から平成15年度にかけての2ヶ年間に限っては同様の位置づけで「造形Ⅰ」を2年次前期1単位、「造形Ⅱ」を2年次後期1単位として開設していた。

平成30年度からは、平成29年に改正された「幼稚園教育要領」¹⁾及び「保育所保育指針」²⁾「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」³⁾が実施される。そこでは、教育の基本として「教材を工夫」

することが求められ、合わせて領域「表現」内容の取扱いにおいては「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」することが謳われている。また、平成20年の前回改正において「表現する過程を大切に」することが初めて明文化されはっきりと求められることとなったが、今回改正でもそれは明確に継承された。乳幼児に係る教員および保育士の養成においては多岐にわたる内容が網羅される。子どもの造形表現活動への保育者としての関わりは、そのような内容を構成するものの一つとして存在し、子どもに対して出来るだけ沢山の選択肢としてのいわば引き出しを準備しておくために子どもの発達段階に適応した造形表現手段について習熟したり、子ども自身にそれらの引き出しを思い思いに引きださせ、気に入ったその中身を自由

*高知学園短期大学 幼児保育学科 *Email: sueta@kochi-gc.ac.jp

に使わせることが出来るようにするために、子どもが“面白い”と感じる造形表現手段が提供できるような資質がこれまで以上に求められることになる。このようなあるべき資質陶冶実現の方策の一環として、昭和53年度「図画工作Ⅱ」（当時）の中でモザイク画技法による共同製作を取り上げた。以来、保育の場における多様な造形的技法の習得をねらいとし、これまで継続して取り組んできた。

今回、これまでの取り組みを振り返り、「モザイク画技法による共同製作」の意義と教育効果を報告する。

Ⅱ 方法

1. モザイク画技法選択の端緒

昭和51年度に上記当該科目などを担当する専任教員として着任し、現在を迎えた。最初の2年間の1サイクルが終わった段階で、授業改善のための若干の見直しを試みた。教育課程の中での基本的枠組みは現在まで変わらないが、当時は領域「絵画製作」に係る「基礎技能」に関する科目として1年次必修科目で通年演習2単位の「図画工作Ⅰ」と、前述した2年次選択必修科目の「図画工作Ⅱ」で構成されていた。必修科目ではない「図画工作Ⅱ」の受講生は主体的に履修を決めた者が多く、全体の傾向として授業に取り組む態度にひたむきが見え、加えて“何かを残したい”との心情を汲み取ることが出来た。

そのような学生の意欲に応えるべく新たなあり方について模索したが、その際それなりの前提条件としてあげたのが次の5項目であった。

- ① 科目設置の目的に沿った内容であること。
- ② 受講生にとってことさら加重な技倆を必要としない技法による製作であること。
- ③ 習得する技法が保育の場でも有効かつ容易に活用でき、造形表現手段提供の巾を拡げられるものであること。
- ④ 明確な目標が設定でき、皆で分かち合いながら取り組める製作の形態であること。
- ⑤ 用いる素材が経年劣化を容易に伴わず恒久的

設置に適し、作品全体の形態が学内で例えば壁面などを現状のまま有効活用できる形で展示が可能なこと。

これらの条件を満たした上で、なおかつ受講生の心の中に、例えば皆で分かち合えるような達成感、あるいは感動などとして残すことができ、さらにそのような思い出を実際に形あるものとしても残すことを可能にする作品製作のあり方について検討を行った。

その結果導き出され選択した内容が、新たな表現技法への接近としてのモザイク画技法による共同製作であった。

2. 授業展開の経緯

昭和53年度に開始したモザイク画技法による共同製作であるが、開始当初はすべてが手探り状態で暗中模索の連続であった。これまでの長い年限の積み重ねのもと、徐々に現在の授業展開のあり方が獲得されてきた。

1) モザイクタイル

モザイク画製作において中核となる素材はモザイクタイルである。

昭和50年代半ば前後においての教科図画工作・美術にかかる教材カタログに掲載されるモザイクタイルは、今日と違いその種類、色数ともかなり限定的な状況に置かれており、選択肢があまり無かった。開始当初の数年間色数が決して多いとは言えないモザイクタイルを用いた製作が続いた。その後、タイル専門メーカーI社が開発した色数がカラー48色、グレー階調7色と豊富であり、サイズは1枚が98mm角の正方形で厚さが2.5mmと薄く、微細な形に割りやすいモザイクタイルが登場するに伴い、より豊かな色彩表現を実現できる素材であると判断され、採用するに至った。表1は、4桁の当該色別番号を付記した全部で55色のモザイクタイルのリストである。

その素材変更の効果は十分得られたと考えられる。

これら55色すべてのモザイクタイルを、91cm四方の木製ラワン合板パネル上に1枚ずつ配置、貼付した実物見本を提示し、受講生はそれと対照さ

表1. モザイクタイルリスト

色別番号	色 名	色別番号	色 名
1001	カーマイン	1002	バーミリオン（朱）
1003	オレンジ（橙）	1004	イエローオレンジ（山吹）
1005	レモンイエロー（レモン）	1006	クリームイエロー（薄黄）
1007	イエローグリーン（若草）	1008	フレッシュグリーン（若葉）
1009	ボトルグリーン（深緑）	1010	ヴィリジャン（青緑）
1011	ライトブルー（薄水）	1012	ベビーブルー（白群）
1013	ラピスラズリー（るり）	1014	ウルトラマリン（群青）
1015	パープル（紫）	1016	パープリッシュレッド（すおう）
1017	オーキッドピンク（薄紅）	1018	ベビーピンク（肌）
1019	キャメル（らくだ）	1020	ライトブラウン（薄茶）
1021	ブラウン（茶）	1032	モスグリーン（苔）
1033	グリーン（緑）	1034	オパールグリーン（白緑）
1035	アクアマリン（水あさぎ）	1036	ライトターコイズ（青磁）
1037	ブルー（青）	1038	ターコイズブルー（薄青）
1039	インディゴ（藍）	1040	ラベンダーブルー（青藤）
1041	ウイスタリア（藤紫）	1042	パールラベンダー（薄藤）
1043	ラベンダー（藤）	1044	グレイプ（紫紺）
1045	クリムソン（えんじ）	1046	ピンク（もも）
1047	パールピンク（薄もも）	1048	ベージュ（亜麻）
1049	サンドベージュ（砂）	1050	セピア（栗）
1051	ダークブラウン（こげ茶）	※以上カラー48色	
1022	ホワイト（白）	1052	パールグレー
1023	ライトグレー	1053	グレー
1054	ダークグレー	1055	チャコールグレー
1024	ブラック（黒）	※以上グレー階調7色	

せながらモザイクタイルの色の選択をしていくことになる。

また、1点の作品を製作するのに使用するモザイクタイルの枚数は、これまでの製作点数が39点と最も多かったF100号サイズ（長辺：162.1cm，短辺：130.3cm）の場合に即してあげるならば最低235枚必要となる。そしてモザイクタイル1枚当たりの質量が38gであることから，F100号サイズの作品であればその重量はモザイクタイルだけで約9kgを占めることになる。

当然のことであるが，毎年度使用するモザイクタイルの色の種類とそれぞれの必要枚数は変動す

る。実寸大下絵を用いながら必要なモザイクタイルの色指定を行い，各色ごとの必要枚数を特定していくことになるが，その必要枚数を割り出す際の独特な計算方式によって必然的に若干多めの枚数となり，場合によっては現実に余剰繰越が発生してきた。そのため，次年度以降に無駄なく活かすためのストック管理を行い，その色別の繰越枚数について常に把握している。

2) 作品パネル

貼り付けられたモザイクタイルの支持体としての基材の役割を果たすのが作品パネルであり，油絵作品に例えるならばキャンバス枠およびそれに

張られたキャンバスに相当する。開始当初数年間は手探り状態でのパネル作成であった。前述のようにモザイクタイル自体もかなりの重量になることも判明し、恒久的な作品の保存、展示を志向する中では、作品パネルの素材、構造には当然のことながらそれなりの強度と耐久力が求められた。そのため、巾36mm、厚さ26mmの棧を縦横井桁状に直行させる形で等間隔（作品サイズによって若干異なるがほぼ400mm前後）に組み上げた木製木枠に、厚さ4mmのラワン合板を木工用ボンド貼りで接着してパネルを作製する方式に固まり、現在まで継承してきた。

また、昭和50年代後半頃の時点で社会福祉法人小高坂更生センターが運営を委託された県立身体障害者授産施設（現在：こだかさ障害者支援センター）の木工科の活動を知り、ごくささやかではあるが地域社会との連携の機会と捉え、上記方式による作品パネル作製の発注を開始して現在までその関係は続いている。

3) 作品の題材

各年度における作品の点数及びそのサイズは、当該年度当初に受講生数が確定した段階で決定している。その決定に基づき、受講生には製作を予定する作品パネルの長辺と短辺の比率を予告して、各自の候補としての題材の提案を求めている。

受講生達自身が共同して案出した題材にせよ、受講生が関心を持っている他者作品に基づく題材にせよ、これまで製作されたすべての作品の題材は受講生達がまず個々に候補を挙げ、鋭意話し合いを深める中で主体的に絞り込み、最終的に全員の合意の元で決定したものである。大筋においては予告した長辺と短辺の比率に沿ったものであったも、微妙に相違した場合は、原作の作品世界を壊さないよう最大限の注意を払いながらトリミングをほどこしたものもある。また大幅に相違した場合は、キャプションの題名の末尾に「(部分)」と記した。

これまで圧倒的多数が他者作品に基づく製作となっている。その場合、モザイク画技法の習得と合わせて、受講生同士で主体的に選択したもので

あれば、原作者の独自の創造の世界をモザイク画の技法に基づきながら辿ることによってその表現された作品世界に少しでも接近できる貴重な場となる。その世界に自分の心を積極的に重ねてみる機会として捉えることの重要性と、さらに原作者へのオマージュとしてキャプションにはその題名の末尾に作者名を明らかにしながら「ー [原作者名] の作品よりー」と記載することの意味について受講生に対し強く意識付けを行ってきた。

4) 接着剤など

モザイク画技法の根幹は、タイル喰切などの工具を用いてモザイクタイルを必要な形に切断し、それを支持体としての基材の所定の位置に接着剤を用いて貼り付ける工程である。昭和53年度開始当時においてモザイクタイル用の接着剤は幾つか存在したが、中には溶剤として毒性が強く受講生にとって安全上の問題が明らかに存在したのもあったため選択肢としてそれらはまず除外し、作品展示場所の想定において屋内に限定していたこともあって、接着剤としては水性の木工用ボンドでもその接着力は十分と判断され、採用し使用し続けてきた。

なお、昭和55年度まで3ヶ年にわたり接着したモザイクタイルの目地を充填する素材として石膏も用いていた。確かに当時はモザイク画仕上げの段階で良く用いられる素材ではあったものの、保育の場で必要とされる一般的素材としては考えにくく、また受講生の負担になっていることもあって見直し、その後においては石膏を流し込む工程は省略することとした。

5) 作品のフレーム

平面的作品を展示する際、通常必要とされる装備にフレームがある。

昭和60年度まで8ヶ年の間は受講生による手作りの木製仮縁をフレームとして装着してきた。しかし、その強度及び耐久力が懸念されたため、その翌年度からはフレームを専用の既製品であるアルミニウム製仮縁に変更し、現在に至った。

6) 作品及びキャプションの取付け展示

昭和53年度当初より展示のための作品の取付け

とキャプションの作製、取付けは、本学事務局の理解を得、全面的な協力の下で専門業者に発注してきた。

まず、キャプションはその基材プレートの素材として厚手の白色プラスチック板を採用し、その最上段部分に「題名」を、他者作品に基づくものの場合であればその題名の直下に「ー [原作者名] の作品よりー」と記載し、次の中段部分には末尾に「期名」を含む「学科名」を、最下段部分には「製作年度」「科目名」と当該科目受講生による共同製作であることを表示した。そのキャプションの作製完了を待って、その取付けと作品の取付けとを同時に実施してきたが、このような方式は今も変わらない。また、平成3年度に「図画工作Ⅱ」から「造形」へと科目名変更したことを契機に、それ以降は最下段部分のその直下に製作者である受講生の氏名を付記することとした。

3. 授業展開の現状

1) 授業の流れ

表2は、平成28年度シラバスに掲載された幼児

保育学科「造形」の授業計画の中から、モザイク画共同製作に関連する部分を抜粋したものである。

表2の左端縦の欄に表示された数字は通年で30回実施される授業の内、15回以降の授業であることを示し、モザイク画共同製作は全部で16回にわたる授業の中で展開される流れとなっている。

前期最終回にその1回目は始まる。そこではまずモザイク画製作手順書を受講生に配付した上で、全体の流れも含めた製作上必要なガイダンスを行う。その後半において受講生が当日持ち寄ったモザイク作品の原画とすべき作品の条件として予め伝えてあった長辺と短辺の比率にほぼ適合する候補作品について、各自が選択した理由を明らかにして提案を行い、さらに意見を出し合いながら話し合いを深め、互いに納得をした上で結論を導き出す形をとっている。

後期に入ってその2回目から7回目までは作品製作の準備段階である。この段階には大きく3つの工程がある。それはまず作品パネル実寸大の下絵作製から始まり、次に実寸大下絵を手がかりに

表2. 平成28年度高知学園短期大学 幼児保育学科「造形」授業計画（抜粋）

15	モザイク画共同製作＜新たな表現技法への接近＞（1）製作ガイダンス・原画作品選択
16	（2）実寸大下絵作製準備
17	（3）実寸大下絵作製
18	（4）実寸大下絵作製
19	（5）モザイクタイルの枚数割り出し
20	（6）モザイクタイルの枚数割り出し・集計
21	（7）実寸大下絵の複写・製作分担領域の確認
22	（8）製作
23	（9）製作
24	（10）製作
25	（11）製作
26	（12）製作
27	（13）製作
28	（14）製作
29	（15）製作
30	（16）最終調整・仕上げ・省察

モザイクタイルの色の選択と必要枚数を割り出し、それをもとに発注する。そのあと最後は作製した実寸大下絵の作品パネルへの複写である。これらの準備段階においては、後述するようにかなり前近代的とも思える手作業のみの流れを敢えてこれまで取り入れてきた。そのねらいはただ一つで、それは将来いかなる保育現場にいたとしてもことさら便利なアイテムに頼らなくても子どもと自然に向き合え、ごく素朴な形で造形表現活動の場を子どもに提供できる豊かな資質の一端を身に付けて欲しいがためである。

例年、発注したモザイクタイルの納品には結構日数がかかっているが、7回目終了後の翌週から実施される2週間の学外実習（保育実習Ⅱ）が終わるまでの間にその納品を待つことになる。

8回目、受講生各人が取り組む製作の責任範囲としての分担領域が決定することによって明確な製作の目標が各自定まり、例年のことながら受講生にとって満を持しての共同製作の開始を迎える。受講生は初めて出会う素材、道具に最初は戸惑いながら、しかし比較的平易な技法のため習熟は早いようである。個人差はあるものの、分担した製作領域の6割から7割程度までの面積がモザイクタイルで埋まらなくなかなか製作が進展したようには実感できないらしく、それまで如何にモチベーションを維持させて製作に集中していくかが受講生にとっては当面乗り越えねばならない課題となってくる。しかしそこは共同製作の妙で、互いに励まし合う中で徐々に隣同士の領域のモザイクタイルが実際に作品パネルの上で繋がりだすと、俄然受講生の目が輝きだしてくる。

過重にならずとも、一朝一夕に容易には終了することがちょっと叶わない程度の丁度の分量に敢えて設定された製作だけに、逆にそれが仕上がった時、その瞬間に皆で分かち合え、共感できる達成感、満足感による喜びも一入となろう。

2) モザイク画共同製作・製作手順書の内容

現在は4ページ綴りの印刷物を製作手順書として受講生に配付している。以下は、過去製作点数が39点と最も多いF100号サイズ(長辺:162.1cm,

短辺:130.3cm)の作品製作に即して示したその製作手順書の内容の概略である。

(1) 作品原画の決定

(2) 実寸大下絵の作製

①原画の写しについて作品パネルと同じ縦横の比率にトリミングする。

$$162.1\text{cm} : 130.3\text{cm} (\div 5 : 4)$$

② [(2)－①] で起点を決め、赤の細字用水性サインペンで1cm間隔の縦横の罫線を引く。

③ [(2)－②] の起点の位置より赤の細字用水性サインペンで縦横それぞれに1から順に整数の番号を記入する。

④ [(2)－①] を何倍にしたら作品パネルと同じ大きさになるか、その倍率(小数第1位まで)を割り出す。

⑤模造紙を両面接着テープで貼り合わせ、作品パネルと同じ大きさのものを作製する。

⑥ [(2)－⑤] の模造紙に、黒の細字用水性サインペンで[(2)－③]の起点と同じ位置から1cm間隔の縦横の罫線を引く。

⑦ [(2)－⑥] の模造紙に、赤の中字用水性サインペンで[(2)－④]で割り出した倍率の数字を一目盛として縦横に罫線を引く。

⑧拡大したマス目に赤の中字用水性サインペンで[(2)－③]と同様の番号を記入する。

⑨ [(2)－⑧] の模造紙を作品パネルに画鋏でとめる。

⑩ [(2)－③] を見ながら[(2)－⑨]の模造紙に鉛筆で拡大画を作製する。

⑪ [(2)－⑩] の鉛筆の線を黒の中字用水性サインペンでなぞり、実寸大の下絵を完成させる。

(3) モザイクタイル枚数の割り出し

①モザイクタイルの色見本の各色を表わす色鉛筆やパスを決める。

色の名称は、必ずその色見本の色の番号で呼ぶこと。

②原画を見ながら、下絵の1cm角のマス目ごとに色指定を行い、[(3)－①]で決めた色鉛筆やパスで色を埋めていく。

③各々の色のマス目の数を数える。

マス目の中に色の境界線がある場合の計算方法

- ・それぞれの領域の面積が半分ぐらいの場合
…………… 1/2 で計算
- ・面積が半分以下の場合…………… 1/2 で計算
- ・面積が半分以上の場合…………… 1 で計算

④必要な色全部のマス目の数のリストを作り、それを総計して下記の数 の範囲内にあることを確認する。

21, 122 (F 100号の面積) ～ 21, 622 (歩留まり数)

⑤色ごとにモザイクタイルの枚数を計算して割り出す。

計算方法

枚数 = マス目総数 ÷ 90 (モザイクタイル1枚の面積として)

小数点以下は切り上げ

⑥必要なモザイクタイルの枚数リストを作る。
色の名称は、必ずその色見本の色の番号で表示すること。

《モザイクタイルの発注》

(4) 実寸大下絵の作品パネルへの複写

①下絵をひっくり返して裏を出し、[(2)－⑪]のサインペンの線に沿って黒など暗色のパスで幅1 cm ぐらいに塗り込む。

②下絵を作品パネルに画鋸で固定し、赤鉛筆で力を入れながら [(2)－⑪] のサインペンの線を

なぞる。

《授業中断・学外実習》

(5) 製作開始

・モザイクタイルの数を数え、注文リストの数と合っているか確認する。

・各人が担当する作品パネルの製作スペースを人数で等分し、その配分を決める。

①必要なモザイクタイルを選ぶ。常に原画の色彩に忠実であるように努めること。

②モザイクタイルをタイル喰切で適当な大きさ、形に割る。

③割ったモザイクタイルの裏面（あるいはモザイクタイルを貼ろうとする作品パネルの表面）にボンドをたっぷりつける。

④モザイクタイル同士の間隔は出来るだけ詰めて接着する。

⑤モザイクタイルが作品パネルからはみ出た場合は、ボンドが乾いてからタイル喰切で切り取る。

(6) 額縁の取付け

(7) 完成

Ⅲ 結果

表3は、平成30年1月現在における当該授業でこれまで製作されたモザイク画作品の一覧である。

表3. モザイク画作品一覧（昭和53年度～平成28年度）

No	題 名	サイズ 縦×横(cm)	展示場所	科目名	年度 学科名 期
1	かぜ	91.0×182.0	1号館1階 学生出入口	図画工作Ⅱ	昭和53年度幼児教育科 9期
2	うみ	91.0×182.0	1号館1階 学生出入口	〃	〃
3	春のグランド＝ジャッドのセーヌ川 －スーラの作品より－	130.3×162.1	1号館2階 西側廊下	〃	昭和54年度幼児教育科 10期
4	ピエロ	162.1×130.3	1号館1階 西側廊下	〃	〃
5	もみじ	162.1×130.3	2号館2～3階 階段踊場	〃	〃
6	市川鯉蔵の暫 －勝川春好の作品より－	162.1×130.3	2号館3～4階 階段踊場	〃	昭和55年度幼児教育科 11期
7	グランドジャッド鳥の日曜日の午後（部分） －スーラの作品より－	130.3×162.1	1号館1階 図書館	〃	〃
8	バラ色のドレスの踊り子 －ドガの作品より－	162.1×130.3	2号館3～4階 階段踊場	〃	昭和56年度幼児教育科 12期
9	眠るジプシー女 －アンリール ソーの作品より－	130.3×324.2	1号館1階 玄関	〃	昭和57年度幼児教育科 13期
10	パンピ －ディズニーの作品より－	130.3×162.1	1号館4階 西側廊下	〃	昭和58年度幼児教育科 14期

No	題 名	サイズ 縦×横(cm)	展示場所	科目名	年度 学科名 期
11	ピアノに寄る娘たち ー ルノワールの作品よりー	162.1×130.3	6 号館 1 ～ 2 階 階段踊場	図画工作Ⅱ	
12	アルジャントユーユの橋 ーモネの作品よりー	130.3×162.1	1 号館 4 階 西側廊下	〃	昭和59年度幼児教育科 15期
13	小舟 ー ルノワールの作品よりー	130.3×162.1	2 号館 2 ～ 3 階 階段踊場	〃	〃
14	ルイ・ダヴィッドに献ぐ (余暇) ーレジェの作品よりー	130.3×162.1	1 号館 3 階 131講義室	〃	昭和60年度幼児教育科 16期
15	花を持つジャンヌの肖像 ーピサロの作品よりー	162.1×130.3	5 号館 1 階 玄関	〃	〃
16	サルタンバンク ー東郷青児の作品よりー	162.1×130.3	5 号館 3 ～ 4 階 階段踊場	〃	昭和61年度幼児教育科 17期
17	ル・ディヴァン・ジャボネ ーロートレックの作品よりー	162.1×130.3	3 号館 3 ～ 4 階 階段踊場	〃	〃
18	雲中天壇 (部分) ー梅原龍三郎の作品よりー	130.3×162.1	5 号館 1 階 玄関	〃	昭和62年度幼児教育科 18期
19	日本の衣裳の女 ーモネの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 3 階 132講義室	〃	〃
20	芳蕙 ー藤島武二の作品よりー	162.1×130.3	1 号館 4 階 西側廊下	〃	昭和63年度幼児教育科 19期
21	泣く女 ーピカソの作品よりー	162.1×130.3	5 号館 3 階 534講義室	〃	〃
22	身の廻り品 ーマグリットの作品よりー	130.3×162.1	5 号館 2 ～ 3 階 階段踊場	〃	平成元年度幼児教育科 20期
23	夜のカフェ・テラス ーゴッホの作品よりー	162.1×130.3	5 号館 2 ～ 3 階 階段踊場	〃	平成 2 年度幼児教育科 21期
24	ユークリッドの散歩 ーマグリットの作品よりー	162.1×130.3	5 号館 3 ～ 4 階 階段踊場	〃	〃
25	ブロードウェイ・ブギウギ ーモンドリアンの作品よりー	162.1×162.1	1 号館 1 階 食堂	造 形	平成 3 年度幼児教育科 22期
26	接吻 ークリムトの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 1 階 食堂	〃	平成 4 年度幼児教育科 23期
27	シャルトル大聖堂 ーコロローの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 3 階 133講義室	〃	平成 5 年度幼児教育科 24期
28	夢 (部分) ールソーの作品よりー	130.3×162.1	5 号館 1 ～ 2 階 階段踊場	〃	〃
29	誕生日 ーシャガールの作品よりー	130.3×162.1	1 号館 4 階 南側廊下	〃	平成 6 年度幼児教育科 25期
30	メキシコの女 ーキスリングの作品よりー	193.9×130.3	1 号館 2 ～ 3 階 南側階段踊場	〃	平成 7 年度幼児教育科 26期
31	ジョブ ーミュシャの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 3 階 北側廊下	〃	平成 8 年度幼児教育科 27期
32	田舎での遊び ーレジェの作品よりー	130.3×162.1	1 号館 3 階 北側廊下	〃	平成 9 年度幼児教育科 28期
33	自然な出会い ーマグリットの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 3 階 北側廊下	〃	平成10年度幼児教育科 29期
34	夢 ーピカソの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 1 ～ 2 階 南側階段踊場	〃	〃
35	コスモスパーク ー永田萌の作品よりー	130.3×130.3	6 号館 1 階 玄関	〃	平成11年度幼児教育科 30期
36	蝶 (部分) ー藤島武二の作品よりー	162.1×130.3	1 号館 4 階 南側廊下	〃	平成12年度幼児教育科 31期
37	朝 (第一案) ールンゲの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 3 階 北側廊下	〃	平成13年度幼児教育科 32期
38	メソポタミア平原 ー平山郁夫の作品よりー	130.3×162.1	1 号館 2 ～ 3 階 南側階段踊場	造 形Ⅱ	平成14年度幼児教育科 33期
39	富嶽三十六景神奈川沖浪裏 ー葛飾北斎の作品よりー	130.3×162.1	1 号館 3 階 北側廊下	〃	平成15年度幼児教育科 34期
40	大家族 ーマグリットの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 3 階 西側廊下	造 形	平成16年度幼児教育科 35期
41	四人の自転車乗り ーレジェの作品よりー	130.3×162.1	1 号館 1 ～ 2 階 南側階段踊場	〃	〃
42	オフィーリア ーミレイの作品よりー	130.3×193.9	1 号館 2 ～ 3 階 南側階段踊場	〃	平成17年度幼児教育科 36期
43	鏡獅子 (部分) ー伊東深水の作品よりー	130.3×193.9	5 号館 1 階 玄関	〃	〃
44	ポントワーズ近くのオワーズ川 (部分) ーピサロの作品よりー	130.3×130.3	1 号館 1 階 学生出入口	〃	平成18年度 幼児保育学科 1 期 (※通算：37期)
45	花炎 ー東郷青児の作品よりー	193.9×130.3	1 号館 3 階 北側廊下	〃	平成19年度 幼児保育学科 2 期 (※通算：38期)
46	「音楽」 寓意画 ーボピノーの作品よりー	162.1×130.3	1 号館 3 階 北側廊下	〃	平成20年度 幼児保育学科 3 期 (※通算：39期)
47	マリリン (部分) ーウォーホルの作品よりー	130.3×162.1	1 号館 3 ～ 4 階 北側階段踊場	〃	〃
48	幸運 ーマグリットの作品よりー	130.3×130.3	1 号館 4 階 西側廊下	〃	平成21年度 幼児保育学科 4 期 (※通算：40期)

No	題 名	サイズ 縦×横 (cm)	展示場所	科目名	年度 学科名 期
49	パラソルを持つ婦人 ―モネの作品より―	193.9×130.3	1号館3～4階 北側階段踊場	造 形	平成22年度 幼児保育学科 5期 (※通算：41期)
50	フェリックス・フェネオンの肖像 ―シニャックの作品より―	130.3×162.1	1号館2階 西側廊下	〃	平成23年度 幼児保育学科 6期 (※通算：42期)
51	ひまわり ―ゴッホの作品より―	162.1×130.3	1号館3～4階 南側階段踊場	〃	平成24年度 幼児保育学科 7期 (※通算：43期)
52	サン・タドレス：海辺のテラス (部分) ―モネの作品より―	130.3×130.3	1号館3階 西側廊下	〃	平成25年度 幼児保育学科 8期 (※通算：44期)
53	受胎告知 (部分) ―フラ・アンジェ リコの作品より―	130.3×130.3	1号館3～4階 南側階段踊場	〃	平成26年度 幼児保育学科 9期 (※通算：45期)
54	牛 ―ウォーホルの作品より―	193.9×130.3	1号館4階 西側廊下	〃	平成27年度 幼児保育学科 10期 (※通算：46期)
55	市川高麗蔵 ―勝川春英の作品より―	193.9×130.3	1号館3～4階 南側階段踊場	〃	平成28年度 幼児保育学科 11期 (※通算：47期)

1. 作品の数

これまで昭和53年度以来毎年度ごとに作品が製作され、平成28年度現在でその総数は55点となった。

製作年度ごとに見ていくと昭和54年度が3点で最多である。次に2点製作したのは昭和53年度、55年度、57年度、59年度、60年度、61年度、62年度、63年度、平成2年度、5年度、10年度、16年度、17年度、20年度の14の年度で、そのほかの24の年度は1点ずつの製作であった。基本的に選択科目であるため毎年度の受講生数が変動を伴い、それが反映された点数の推移である。

現在、56点目となる作品の製作が進行中である。

2. 作品のサイズ

初めて取り組んだ昭和53年度は通常の三六版ラワン合板1枚分(長辺：182.0cm、短辺：91.0cm)のサイズでの試行製作(2点)であったが、その翌年度以降は基本的に油絵のキャンバスサイズ(日本サイズ)に沿った規格から、受講生数の動向等も勘案しつつこれまで全部で6種類のサイズを採用してきている。過去最大のサイズは昭和57年度製作の横位置のF100号を2点分組み合わせた縦130.3cm、横324.2cmの作品(1点)である。以下サイズの降順で見えていくと、縦位置、横位置の違いはあるが、F120号(長辺：193.9cm、短辺：130.3cm)が7点、S100号(長辺、短辺ともに162.1cm)が1点、F100号(長辺：162.1cm、短辺：130.3cm)が39点、S60号(長辺、短辺ともに130.3cm)が5点となっている。

共同製作のため、受講生各人が取り組む責任範

囲としての製作面積は均等配分が前提となる。加えて、製作年度の違いによる受講生一人当たりの製作面積において極端な増減の差も出来る限り抑さえなければならない必要があつてのこの結果である。

3. 受講生の受けとめ

近年、学生による授業アンケートが実施されているが、22名が受講した平成28年度当該科目に関する授業アンケート結果(回答者数21名)に対して自己分析を試みた。

それによると、『6.(評価項目番号、以下同じ)教員は熱意を持って授業をした[「5：満足」、「4：ほぼ満足」を合計して(以下同じ)90.5%]』、『7. 教員は授業の開始・終了時刻を守って授業を進めた[90.5%]』、『8. 教員の話し方や速度はわかりやすいものだった[90.5%]』、『9. 教員は学生が授業へ積極的に参加できるよう工夫した[90.5%]』、『10. 板書や機器を用いた説明はわかりやすかった[90.5%]』、『11. 学生自身は授業の予習、復習をした[90.5%]』、『12. 学生自身はこの授業へ積極的に参加し、真剣に学んだ[90.5%]』、『13. 学生自身はシラバスに示された到達目標を達成できた[90.5%]』、『14. 学生自身はこの授業から新しい知識・考え方や技能・技術を得ることが出来た[90.5%]』、『15. 学生自身はこの授業をきっかけに、さらに学びたいと思った[90.5%]』に続き、『2. 授業内容は、シラバスに示された授業の目的に則して進められた[85.7%]』、『4. 授業の教材(教科書、配付資料など)は有益であると感じた[85.7%]』、『5.

授業内容はわかりやすかった [85.7%]』、『1. シラバスの内容は学習を進める上で役立った [80.0%]』、『3. 各回の授業内容の量は適切であると感じた [80.0%]』の順に、全体で8割以上の学生が15の評価項目の全ての項目においておおむね満足しているものと推測される。

この結果からモザイク画技法を取り入れた取り組みにおいても受講生には実際に一定程度の満足感があったことになり、それはその製作における達成感や感動の実体験から誘発されたものと推察される。

Ⅳ 考察

保育の場では、子どもの情緒豊かな育ちを実現していくための手段の一つとして造形表現活動があり、そのような活動を豊かに展開させるための保育者養成が求められている。モザイク画技法を取り入れた授業に取り組んできたのも偏にその一環としてであった。

そしてこれまでの取り組みの40年近くの間、一方では好むと好まざるとに関わらず「もの」との関わりの喪失の度合いが徐々にではあるが、しかし確実に進展してきた。例えば、人も含む「もの」に対するコミュニケーションや種々のアプローチの過程において、従来は少なからず情緒的な側面も伴いながら結構努力したり、工夫したりしながら自ずと達成感などが経験として得られ、それが次のステージへ足を踏み出す原動力たり得てきた。ところが、科学技術の高度な発達によって何かと便利になった結果、徐々に必要な過程を踏まらずとも求める結果が簡単に得られるかのように思わせる時代が到来し、ものに対する価値意識が変わってきたことは否めない。それにつれ年々入学してくる学生にも、そのような経験不足からか授業の中で実際にどのように作品を仕上げにもっていった良いのか掴めず、戸惑う姿も見受けられるようになってきた。時代の流れとともに、結果として達成感や感動を伴うような、描いたり作ったりする造形表現体験との出会いが少なくなりつつ

あるような状況がその原因の一つとして考えられよう。保育者自身のそのような造形表現体験が希薄なままでは子どもに対しても自信の持ちようがなく、造形表現活動の場において真の意味で子どもと向き合い、共感することは非常に困難になってくるだろう。そして造形表現活動はいかなる場合においても「もの」との関わりが前提である。そうであればなおさら保育者養成においては、「もの」と実際に向き合い、「もの」に直接働きかけることによって得られる達成感や感動が味わえるような製作をし、表現する過程の体験の場を提供していくことの重要性が増してくるのである。そのような受講生にとって意味のある経験を実際に積み上げていく中において保育者の養成を模索してきたのであり、その点で一定の教育効果があげられたものと判断している。

さらに、教育実習、保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱ等の実習期間中において教員は各実習園を巡回することになるが、巡回先各所の園内にモザイク画技法を用いて製作された素朴で自由な子ども達の作品の恒久的と思われる展示が最近ぼつぼつ目に付くようになった。当初一朝一夕の成果は全く期待してはいなかったが、当該授業を受講し卒業した学生がすでに500名前後にのぼる中、これまでの長年にわたる取り組みの波及の一端が、僅かながらではあるがようやく成果として現れ始めたと見ることができる。

引用文献

- 1) 平成29年文部科学省告示第62号, 幼稚園教育要領
- 2) 平成29年厚生労働省告示第117号, 保育所保育指針
- 3) 平成29年内閣府文部科学省厚生労働省告示第1号 幼保連携型認定こども園教育・保育要領

受付日：平成30年1月25日

受理日：平成30年2月9日

Data

The Measures in the Classes Teaching the Mosaic Techniques in the Required and Elective Subject, “Plastic Arts”

Koichi SUETA*

Abstract: For about forty years, I have been trying to hold classes which give students a sense of achievement and help them to express their eagerness by creating a piece of art, in order to meet their motivation, in a required and elective subject for training nursery teachers for second-year students in the then field, “arts and crafts”. The aim of the classes was to have students acquire various art techniques used on nursery sites, so I have had them create a piece of mosaic together as an opportunity to learn a new technique of expression in class. Although having them use materials and tools for mosaic and holding these classes were on a trial-and-error basis, 55 pieces of mosaic have been created so far and are now displayed in our college. Few as they are, pieces of mosaic created by children can also be seen on nursery sites these days. I reported the measures in these classes and their teaching effects.

Key words: mosaic technique, plastic art expression, training of nursery teacher

*Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education Care, Email: sueta@kochi-gc.ac.jp

